

ギターと私(4)－大学時代①

運よく「立命館大学文学部文学科日本文学専攻」に合格した私は、希望を胸に京都へ向かった。高2の時の成績では進学さえあきらめなければならない状態だったので、自分でもよく合格できたものだと思う。この年(昭和46年・47年)の秋から冬にかけての大学受験の季節は、いまだに脳裏に残っている。将来が見通せない、辛く厳しく寒い冬であった。

さて、大学時代はあまりにも思い出が多すぎるが、とりあえず、記憶が一番強い「新人ギター演奏会」についてから書くことにする。「新人ギター演奏会」は、中部日本ギター協会が主催した演奏会である。その名のとおりに、「新人」に演奏の機会を与えるのが目的であったと思われるが、同協会が発足した昭和42年に第1回が開催され、平成3年に25回で幕を閉じ、翌年から「名古屋ギターコンクール」として発展的解消を遂げた。当初は、各ギター教室から推薦された者がホールで演奏できる機会を与えられたそうだが、第5回からオーディション制に変わった。当時、東海地方でクラシックギターを志した者は、等しくこの演奏会出場を目標に腕を磨いたものである。

この演奏会の第6回のオーディション(昭和47年10月実施)に合格し、華々しく登場したのが、私や近藤さんと一緒に入門した同級生の彼であった。当時まだ耳新しかった、L.ブローウエルの「舞踏礼賛」の演奏は、さぞ審査員たちを驚かしたことであったろう。この曲を選んだのは、故武山明先生だが、常にレコードの新譜をチェックし、楽譜を入手していた先生が偲ばれる。しかし、この選曲にはギャンブル的な一面もあったのではなかったか。それは、オーディションで、世間一般に知られていない曲を演奏するのは、ある種の賭けだからである。審査員も大いに戸惑ったに違いない。とまれ、同級生の彼は、審査員全員の投票を得て合格した。弟子も師匠も大満足の結果であり、特に、師匠の「してやったり」と言わんばかりの得意満面なお顔は、今でも記憶にある。

翌昭和48年には、私とそのオーディションに挑戦した。近藤さんが病を得て入院生活を送っていたからであり、技量的には彼が挑戦してしかるべきであったろう。そして、私は落選した。さらに、翌昭和49年には、本復した近藤さんが挑戦して合格した。オーディション落選に失望した理由ばかりではないが、私は、「武山明ギター教室」を退会した。今から思えば、3年間ほどお世話になったことになる。それからは、大学の顧問格だった尚永豊文先生にレッスンを受けたり、東京の「河野ギター製作所」の寮で、同郷の先輩、小島浩宜先生にレッスンを受けたりした。

そして、昭和50年、特定の先生に師事しないまま、無謀にも新人演奏会のオーディションに再挑戦した私は、何とか合格することができた。弾いた曲は、A.バリオス「ワルツ Op.8-4」である。昭和50年11月27日(木)、名古屋市民会館中ホールで行われた「第9回新人ギター演奏会」に出演した私は、念願を果たして心からうれしかった。ちなみに、その演奏会に出演した10人のギタリストの卵たちの中には、村松有二氏、服部寛氏、樹神功氏とともに、何と藤井敬吾氏の名前があり、その年から制定された「協会賞」は、信清秀晴氏が獲得した。

私は、自分にギターの才能があるなどと思ったことは一度もない。ただ、失敗にくじけず努力を続けることも才能の一つだとするなら、その才能は少しばかりあったようである。というより、新人演奏会のオーディション落選を撥ね返した原動力は、負けず嫌いという反骨心に他ならなかった。

(2019.11.20 記)